

小さな口がパクパク。開いたり閉じたりしている。

あの学校の小さな池で、校長先生は鯉を飼っていました。

餌を投げると食欲になって、水面上にまで出てくる。明日も明後日も降ってくる餌だろうに、何が彼をそこまで駆り立てるのか。気になった私は池に通うようになり、やがて気が付く。私が歩いてきただけで、彼は準備しています。手を叩くと寄ってきて、口がパクパクとやります。その両目は水平上の反対に位置し、一体何が見えているのか。彼の躍動で波打つ水面が、その黒目を濡らします。濡らして煌めいたかと思えば離れて、太陽に晒された黒目が、ずんずんと乾いていきます。

ああ、瞬きがしたい。

私は思いましたが、彼はしません。そのときに学びました。彼は瞬きをしない。

また翌日。手を叩くと昇ってきます。濡れた黒目が、また煌めいた傍から、ずんずんと乾いていきます。パクパクが私に喋りかける。故に考えてしまったのです。真面目に。

私は大きく息を吸い込み、頭から池に突っ込む。幼い頃に市民プールで、ぐずって水の中に入ろうとしない私を、父はプールサイドから投げ入れて嘲笑する。溺れ死にかけた私は、あれから水泳が嫌いです。プール開きのときにはゲロを吐きまして、卵を落としたチキンラーメンみたいにしてしまったこともあります。

あれ？

話がずれちゃいましたね。何でチキンラーメンの話なんか・・・

あ、思い出しました。そんな心の傷跡がどうしてもよくなるぐらいに、気になってしまったという話です。

私は目を開けていました。あらゆる微生物が揺蕩い、茶色いスモークが焚かれているようです。眼球表面に付着し、チクチクと静電気が走るみたいで、何か、ダニに食べられているみたいだと思いました。ああ、瞬きがしたい。私は彼ではありません。欲求がありました。理性で抑えました。私の前にあるのは、知的好奇心です。彼はいつも、何を見ていたのでしょうか？パクパクが喋りかけるのに私にはわからないので、気が狂いそうだったのです。

だから首を捻り上げて、私は太陽を見ました。

結果は覚えていません。池から顔を出して気絶していた私は、バクテリアと水草に包まれ、涙を流していたと言います。見付けた人は、キラキラと水晶体のように言っていました。その異形のあまり死んだかと思われていた私は無事を確認され、保健室で目覚めます。命を貰い受けた代わりに、この私は、校長先生に詰問を受けることになりました。

「今回の事は、君にとってとんだ不幸だった。しかしだ、君は私の池で、一体何をしていたのかな？言いたくはないが、あのようなところで精通を迎えるだなんて、普通ではないと思うのだけれどね」

「あ、コーさんじゃないですか！本当にまた来てくれましたね～」

「うん、まあ」入店するやいなや、太陽のような笑顔。最早一種の皮肉なのか？適当に本棚を指でなぞりながら、適当に返す。そんな僕に向けて、ユメちゃんはいそいそとカウンターの下から何かを取り出してみせた。

「コーさん一押しのJ・K・レーニャ先生の新作、入荷されてましたよ。えっちいしゲロいしで私にはよくわからないですけど、でも、買っていくんですよね！」

並ぶ本の背中のカラフルな感じが、今日は少し目にきつい。「うん、まあ」と返事だけはおく。ゲロいって、どういう意味合いで使ってるんだろう？「コーさん、コーさん」小さくガッツポーズのユメちゃん。「元気げんき。ね！」

ちょっと微妙な本が置いてある本屋。僕の日常の現場。とは言っても、僕が見付けてから三年もすれば、どの店も消えていく傾向にあるけど。やっぱり売れないんだろうね。

ここで働くユメちゃんは近くの学生で、もう二年目になる。オタク趣味でもないのにこんな場所で、苦痛ではないのか。お客も少なくてつまらないだろう。無暗に元気な彼女に聞いてみたことがあるけど、意図は伝わらなかった。「辛いこともあったかもだけど、コーさんが来てくれますからね！」取り敢えずはそのズレた回答を聞いて、この店のXデーも近いなと思った。それから何と無く通い続け、予想よりは店も持っているわけだが。

その元気なユキちゃんがまだ何か言っている気がしたけど、「うん、まあ」と飛ばしておく。それがユメちゃんの気を悪くしたかはわからないが、彼女はプイと僕から目を逸らして、閉店間近の時計とにらめっこを始めた。これでようやく落ち着いて散策ができる。しかし、少しふて腐れ気味でカウンターに座る彼女の遠くからの姿は、いつもの店の人というよりもただの女の子らしい。僕みたいな変態の目には寧ろ毒な感じだ。

ところで、今の僕のステージはどこだ？

少ない客の一人が本を取ってカウンターに向かうと、慌ててユキちゃんは飛び切りの笑顔を用意して声を掛ける。そんな見慣れたこの店の全部が、ガラス戸を通した彼方から聞こえてくるみたいだ。

あの尋問の非日常の現場から、僕は呆気なく解放された。

「本当にいいんですか？」と僕は聞いた。「話を聞くに、僕って、事件の最重要人物だと思うんですけど」

チビちゃんは二杯目のレモン水でもくちゅくちゅとしながら、不思議そうに僕を見た。

「とるものはとった。コークスクリューも決めた。なら、別にいいんじゃないか？」

「僕に聞かないで下さいよ」

「ニャハハ、出すもん出ただけのアへ顔おシャブられ野郎に何がわかるかって」

「は？」

ガチャンと扉が開いた。試験管を出しに行った桜城が、戻ってきたのだ。

「端に、君がただのゴミであるという話ですね」中には入らずドア横に待機し、僕に道を示す。「机の下のティッシュペーパーに、人は殺せないでしょう？」

「は？」

「御苦労だった、桜城。ミルクの結果はどうだ」

「それが、鑑識のあやつが見当たらない為、少々時間がかかりそうです」

「ったく、あのババア、何年鑑識やってると思ってんだ」

壁に蹴りを入れてチビちゃんが騒ぎ出したので、桜城が宥める。恐ろしいことに、チビちゃんの地団駄で取調室が揺れていることは間違いない。こうなると、僕の存在なんて本当にどうでもよさそうな感じだ。

「それじゃ、お言葉に甘えて帰らせて頂きます」

「お、放つといて悪い。二度と戻って来るなよ」

いきなり笑顔のチビちゃんだが、ぶっちゃけ被疑者な僕に対してそれはどうなの？

「一応、釘を刺しておきますが」桜城の重い声。責められた記憶が蘇り、意図せず体が固くなる。「逃げてしまおうなどと、考えることがありませぬように」

またもその場しのぎで、僕は笑ってしまった。

「無駄な忠告だよ、桜城。こいつにそんな度胸はない。だからこちらから逃がす。

だろう？留置所も我等も、タダじゃないんだ」

僕はドアを閉めた。呆気なく解放された。偶然通りかかった婦警に「お疲れ様です」と敬礼を貰う。それは違うんじゃないの？馬鹿みたいに乳ぶら下げてさ。暖房の効いた空間から出ると夜風。目の前をトラックが行く。外から見れば、いつも道中で見てきたくたびれ気味の庁舎。落ち目の郊外で何をしているのか、よくもわからなかった筈の御庭番の居場所。僕の住処と離れた最寄駅を繋ぐ四車線が、大きな垂れ幕のように横たわっているのだ。携帯を見ると、八時を過ぎたところ。また『彼女』からのメール。帰ってくるの遅いね。少し寒かった。寂しいのかな。死にたくなってきちゃうよ。

「本だけだな、優しいのは」

「ゲテモノみたいな本ですけどね～、ここにあるの」

独り言のつもりだったのに、隣にユメちゃんが来ていた。棚をチェックしている。

「女の人のえっちいところをいじってるだけの本が優しいなんて、よくわからないですよ」

「キモい？僕らみたいな」

「う～ん、それもわからないです、かな」

ユメちゃんには笑顔があるから、こちらもよくわからない。それが気楽だ。

「こうして並んだ背に触っているとね、落ち着いてくるんだ。人と話してるみたいで」

「そんなものですかね？」

本の上の僕の手には、ユメちゃんは手を重ねてきた。びっくりして手を引いてしまう。

「アハ、恥ずかしがり屋さんだ」

「人は苦手なんだよ。熱量が怠い」

「私はこっちの方がずっと落ち着くんだけどなあ。その昔ですよ、人は抱き合えるようにできてるって人がいましてね。なるほどって」

「君、カウンターの方はいいの？」

「店長がついてくれていますから。ギックリやっちゃったらしくて。それでね、お母さんが死んじゃったとき、私、凄い泣いてたらしいんですよ。でも、お父さんがぎゅ〜ってやって、息を吸ったり吐いたり、私のリズムに合わせて、そしたら私、泣き止んで眠っちゃったんですって。魔法みたいですよ〜！」

「魔法・・・」

「ちょっとだけロマンティックって奴です」

薬というよりも、魔法。じゃなくて魔術だったか？

確かに、あれはフラクタルに励起していた。僕のちんぼも。

「あれ？」

カウンターの方から、大きな声が聞こえた。

「店長？」ユメちゃんが声を掛ける。「どうかしました？」

「何か変な臭いがするねえ。少し嗅えたみたいなの・・・」

ハゲ茶瓶のしかめ面が見えるようだ。

「あ、すみません。それ、私の香水だと」

「香水って君ねえ」

「でも、せうかくコーさんに貰ったんですよ〜」

は？

記憶には無い。

「じゃあ仕方ないかなあ・・・今日だけだよ」

「ごっつぁんです店長〜」

「しかし、香水というより」

「コロンみたいな感じですよ〜。私、手に付けてみたんですけど、いまいちしっくりこないんですよ。コーさん、こういうのわからなさだから、間違えて買っちゃったんじゃないですか？それか貰い物とか」

僕に向けて両手を翳す。太陽みたいな笑顔。でも、本当だ、嗅えた臭いみたいなものがある。こういうのに僕は鈍い方だから、全く気が付かなかった。

「ま、色々あったかもでも、コーさんがくれたものですからね！私は幸せですよ〜」

「・・・悪いけど、思い出せないな」

そうだ、悪い予感がしている。声が震えているのを、気付かれないことを願った。

遠くから男が、おいでおいでをしている。

僕と同じ男が、手を叩いてしている。

「知りません」さっきも同じことを言ってたっけ。

「もう～、コーさんたら隠さないでもいいじゃないですか」グッと僕に顔を寄せるユメちゃん。小さな声で「それで、二人だけで話してたい話って何ですか？お昼に言われてから、私ずっと気になってたんです。まさかね、コーさんがそんな、ね」ユメちゃんの顔が真っ赤になって、少しの間止まった。「そりゃ、私の予定なら空いてますけど」と、いそいそと作業の方に戻っていく。

は？

それが今日の昼のことなら、僕は寝ていた。一度だけ「スローイン」で叩き起こされて二度寝。次に起きたときには夕方。朝は寒いし、これぐらいでちょうどいいと思った。やる事が無いってのは幸せなことだ。

そんなお昼に「やあ、ユメちゃん」と、僕が来たというのか。

こんな僕が言うのもなんだが、君は美しい娘だ。だから君に、とっておきの香水をプレゼントしてあげるよ。シュッと一吹きでモテモテのズブズブ。君の青函トンネルも性感に生まれ変わりさ！ハッピーバースデー新しい自分！僕が入りたいから、臨月十日はアクメ記念日さ！ところで、J・K・レーニャ先生の最新刊はないかな？・・・・・・そう、わからないか。気にしない、気にしない。後でまた来るからさ、エロエロでいこうぜ！そのときがきたら、二人きりで話したい・・・なんて、ね。

そんな僕って、誰？

思い出す。ユメちゃんは言っていた。本当にまた来てくれましたね～。

そのときの僕って、誰？

僕の声が聞こえた。

「部位に定着、浸透に至るまで、およそ8分」

なのに、少し変だと思った。

「動静脈に到達、諸器官に機能するまで、256分」

「妙なこと言って、ごまかさないで下さい」ユメちゃんが手を止めて、僕の方を向き直した。顔の火照りはそのまま、僕の知らなかった笑顔で「これでも私、コーさんが思ってるよりずっと、マジメでいい子なんですから」

でも、あれ？ユメちゃんは首を傾げた。

「今までの仕様では考えられない・・・キレた新型さ」

僕の知らなかった笑顔で。

「コーさんが、二人？」

僕を指して。

「一体どうなることに、君は賭ける？」

僕じゃない僕の声が、大きくなった。

パチン！！

ところ変わって、『コー』曰く『くたびれ気味の庁舎』—カラサワ市キタ区警察署。その地下に隠された『秘密司令部』にて、サイレンは鳴り始めた。

そこは、表のくたびれた姿に似つかわしくなく巨大なコンサートホールのようにあっており、無数の機器が同心円状に配備、数多の婦警の手によって管理されている。ブリッジに相当する二階部では『チビちゃん』が、『桜城』と共にインカムを通じて何やら指示を出していたが、サイレンと共にその動きを止めていた。

「捉えました！」と、巨大おっぱいを震わせて赤髪の婦警。『コー』に敬礼をした女だ。「隊長の読み通りです。二十面相、マル被の半径20m以内に出現」

司令部中央の巨大スクリーンに、レーダー画像と衛星画像が出力される。同時に、赤髪とは対称の位置の、今度は胸の小さな婦警が、目の前の機器で行動を開始。「対象に『超然^{アブスト}乗拍因子^{ハクシビリテイ}』の存在を確認。奴は『やる気』ですよ。隊長、御指示を！」

報告が終わり、ドカンと『チビちゃん』は大笑いを始める。

「ニヤハハハハハ！！やはりあのボンクラに発信器を付けたのは正解だった！！まんまと引っ掛かるとは、飛んで火に入るゴキブリホイホイじゃブラァァァ！！」

「仕掛けたのはコークスクリュウのとき・・・といったところですか？」

「私レベルの女が、タダでおフェラのスクリュウドライバーかますと思うか？意味はわからんが、バッチリ写真には写ってる男なんだ。何かしらあるには決まってるんだよ」

エヘンと腕を組んで『チビちゃん』は得意げである。

「さすが隊長。アバウトとは言え、考えるべきところは考えていた、と」

「その何かもぶんどってやろうとスペルマ出させたのに、クソババァはよお」

『チビちゃん』が壁に蹴りを入れようとしたところで、ブリッジの巨大扉が開き、文字通り誰かが転がり込んできた。大きすぎる白衣の裾を踏んづけたようで、子供じみたクマさんパンティーが丸見えになっている。「何が起きたアルか？宇宙人が麻婆豆腐アルね？」白衣の下にはチャイナ服。「あり？眼鏡はどこ落ちたネ？」と、いろいろ雑なチャイニーズである。

「てんめ、今更来やがって、クソババァ〜！！」

「ババァとは失礼アルね！まだ2の6乗から7乗の間アルよ！」

「まあまあ、隊長。今はそんなことしてる場合ではないでしょう。はい、リーさん、眼鏡です。後、依頼の品です」

『リー』と呼ばれた女の子に、『桜城』は『コー』の精液が入った試験管を差し出す。

「了解アル！」

敬礼するやいなや、『リー』は試験管の中身をジュースみたいに飲み干してしまう。

「日本男児のミルクセーキアルね。AGCAGTC・・・取り敢えず、遺伝子構成は過去の現場のそれとは別物アルよ」

「あの男、やはりシロですかね？」

「さーな」そのことに『チビちゃん』は興味が無いようだ。

「ただ、何か、妙な味もするアル。これ、ホントに日本男児のアルか？」

「それはどういう？」

『桜城』の問いに、『リー』は顔をしかめた。

「遺伝子構成のズレが大きすぎるアル。3%も違うなんてありえないアルよ」

「きた！！」『リー』の言葉に、『チビちゃん』は手を叩いた。「それはつまり、どういうことだ、鑑識屋？」

「人間と猿の遺伝子構成の間には、1%も差が無いアル。究極生物学的には、種族間なんて小数点以下の積み重ねの違いでしかないアルよ。それが3%も違うとなると・・・」

「となると・・・？」

『チビちゃん』が詰め寄る。

「少なくとも、人間でないことは确实アルね」

「ニヤハハ！！やっぱり何かがあったわけだ。偉いぞ〜クソババア！！」

「そうすると、あの男、クロだったんですかね？」

「ヤッコさんが出てきてるからにはそれはないだろうが、あのボンクラにも何かあるには違いないね。キシシ！！これくらいイカレてきてこそ、我等の出番ってところよ」

インカムのレベルを『チビちゃん』は最大にあげる。

「さあ、諸君！！ついに事件も大詰めだ。美少女誘拐強姦魔死体遺棄及び売買媚薬擦り込み視姦型オナニストを縛り上げ、薬中ホモの花園に送り付けてやるときだ！！その為には町の一つや二つ、打っ潰したって構わない。そうだろう？」

広大な司令部の一面に敬礼の海。

『チビちゃん』の懐で、時代遅れのPHSが輝きを放つ。

「発信！！ポリスブレイバー！！」

背中の辺りから店中に、彼の指を弾く音が響いた。僕はその方を見やる。

そこに『僕』がいるってことはわかっていたから、そこに僕と同じ顔があっても、何も驚くことは無い。でも、実際には驚いてしまった。現実にはそこにあった顔は、僕と同じ作りなのに、あまりに僕らしくなかったから。

「やあ」と『僕』は言った。「ずっとずっと、君に会いたいと思っていたよ。神というものは私達の、傲慢な信仰に答えてくれるものだね！そんな愛すべき君に、あれがちょっとしたプレゼントだ」

あれ。

考えるまでもない。

『僕』の指が示すのはユメちゃんの方で、思わず息を呑んだ。

「あ」

と、ユメちゃんの声。

振り返ると、僕達に向けられている指先がもこもことしていた。

「何？」

と、またユメちゃんの声。指先を抑えている。でも、どちらの手も、もこもこもこもことしていたから、何の意味も無いのではないか。核の陽に当てられて腫れ上がったヒトミみたいな人のことを、僕は思い出した。もこもこはどんどん激しくなって行って、爪が剥がれて飛んでいった。指の先がぱっくりと割れて、骨の先端が覗く。ああ、気持ち悪いと考えていたら、もっとよくわからないことが起きる。

沢山のちんぼがツクシみたいに生まれて、ユメちゃんの指は破裂してしまった。大好きな本の背に、ユメちゃんの血液が放射される。ユメちゃんが狂っちゃって、悲鳴が上がり始めた。何事かと、ハゲ茶瓶の店長が近付いてくる。と思えば、何でか首が無くなっていて、やっぱり代わりに、ちんぼこが花のように湧いていた。スイートピーの花瓶みたいになっても、暫くは歩く。暫くだけ歩いて、奇天烈なケンタウルスと化した店長は動かなくなった。血が出ていると同時に精液も出ていて、フルーチェが作れる。

「私は恢キ一人二十面相」

どうして出てきた、そのマント。

「君とは無二の、友達でありたいと思うよ」